

学位論文題名

## 青年期精神障害者へのケアリング

精神障害者の narration 分析をとおした自己の成長に関する研究

### 学位論文内容の要旨

青年期精神障害者へのケアリングとは、これから人生を切り開かんとする青年期において精神疾患や障害を抱えるという事態に直面した人が、どのように対処しどのように自己を育て生き抜いていくのかといったテーマに主題をおいたものである。

Mayeroff は、ケアリングとは相手が成長し、潜在能力を発揮することを助けることであり、他者への専心（devotion）をとおした応答によってその実質を持つと述べ、成果よりも今現在が織り重なっていく過程を第一義的に重要とする現在化の重視を貫き、ケアリングは人生における実りある秩序、自己と外界との調和をもたらすものであると述べている。Mayeroff のケアリングは臨床における利他主義が貫かれ臨床実践・研究を支える思想としての意義をもち、時間論的アプローチを含んだケアリングを示唆し、かつケアの受け手から継続的に学ぶことの意味が論じられている点において評価しうるものであった。筆者は、青年期精神障害者が己の人生を生き成長していく過程に共に添うことのできるケアの担い手となることが臨床実践の課題であると認識し研究をすすめることとした。しかし、ケアリング研究においては、いまだこうした問題意識によって当事者の主観的体験事実とその意味を知ることに着目した研究は少なく、近年ようやくそうした議論が開始されつつあるのが現状として指摘された。

精神保健福祉の歴史、精神障害者の生活史の検討からは、当事者の人権が尊重され主体性が開かれていき、他者への寛容が問われる時代が到来していることが示された。さらに歴史的背景を重ねて精神障害者の手記を検討した結果、〈共通感覚への知〉、〈共生への知〉、〈協働への知〉、〈共育への知〉という読み手にもたらされる4つの「知る」という行為の意味が明らかになった。

精神障害者のリハビリテーションにおける精神障害者へのケア研究では、「体験としての障害」というような主観的体験へのケアとして、障害受容のプロセスが主に取り入れられている。本論ではこの障害受容論を批判的に検討しその再考の必要性を指摘した。さらに精神科リハビリテーションにおける精神科デイケアのもつケア機能の現状と今後の展望を整理し、青年期精神障害者への人間発達支援機能が新に求められることを提起した。

本研究の目的は、病気・障害を抱えながら生きていく、生き抜いていく精神障害者が自らの体験を再構成していく過程に焦点をあて、自己存在の確かさ感（self-awareness）が育ち成長していくプロセスに着目し、そのケアリング過程の探求を目指す仮説生成型研究である。これは青年期精神障害者へのケアリングとして、精神科リハビリテーション分野における新たな知見をもたらすという意義をもつものである。

本論文における研究モデルは、事例研究と調査研究の組み合わせによって構成される質

的な研究であり仮説生成型研究である。研究デザインは、ケアリング概念に基づいて構成され、事例研究では《二者の関係の展開と成長を助けるケアリング過程の探求》を、調査研究では《人生に意味と秩序をもたらすケアリング過程の探求》を意図し全体を構成した。

事例研究は、事例研究1と事例研究2の2部構成となっている。事例研究1では、筆者が関わった2つの事例について、援助者と相談者との具体的なやり取りの実際を検討した研究である。事例研究2では、自己存在を恢復するまたは育てる関わりについて論じ、自己存在の基盤としての主観的体験の構造化の意味と体験における情動の意味に焦点を当て検討した。本ケースは自傷行為を繰り返し、「死ぬ」と決めたとはいながらも生きる意味が欲しいのだと問い続けた。その経過は「治す」過程というよりは「生き抜く」過程をケアすることであり、その治療関係においては充足される関係のみならず不足状態にある関係性の中にあってもなお、互いに生き残ることができる関係事実の積み重ねもまた必要なのだという点が重要な発見であった。

調査研究では精神科デイケア利用者5名を研究協力者に、退所時期と退所2年～4年後の2回インタビューを施行した。インタビューデータは当事者の *narration* として加工し質的分析を行った。1回目と2回目の *narration* の変化は、青年期精神障害者の自己の体験構造の綴り方の変化として〈共存〉〈和解〉〈悪循環〉〈所有〉〈日常化〉の軌跡として5人5様に示された。さらに *narration* の分析を通して自己の体験構造の綴り方 (*récit*) には、7つのパターン—〈おさまらない〉〈帳消しにする〉〈あずける〉〈わりあてていく〉〈共存する〉〈綴りなおす〉〈添える〉—があることが見出されその特徴が明らかになった。これらは自己の体験のおさまり具合の質を表し、その構成は変化しつづける自己の輪郭形成の過程であり自己存在の確かさ感 (*self-awareness*) の生成過程を表すものであった。

総合考察では、第1に障害受容について論じた。精神障害者自身の *narration* に示された一人一人の対処努力とおさまめた、そしてその困難さを知ることによってもたらされた新たな知見は、なにより、病気・障害を抱えて主体的に生き抜いていく道のりから、障害受容を意味する〈和解〉の軌跡以外にも、〈共存〉、〈所有〉、〈日常化〉というおさまりをつけた対処の道のりが示されたことである。ここから「見えない障害」という特徴をもった精神障害を生き抜いていく過程においては、障害受容のみを唯一のゴールとして導くのではなく、どのような対処を選択し今の自己におさまりをつけようとしているのかを知ることが重要であるということが導かれた。さらにその作業は、〈悪循環〉の軌跡が示したように、時間の経過とともに変化し、病気がきれいさっぱりなくなることがないのと同じように、終わることなく続く過程であることを示していた。精神障害者たちの *narration* に添うということは、見えない精神障害を見えるものとして言葉化し、筋書きをつくる作業であり、それそのものが人とのつながりをつくり、対処努力を導き、有力化 (*empowerment*) を支え、自己の成長を助けるケアリングとなり、主体的に人生を「生き抜いて」いく意味を与えるという精神障害者へのケアリングにつながるということを結論づけた。

第2の考察は、ケアリング概念に沿って論じた。《二者の関係の展開と成長を助けるケアリング過程の探求》については、自己効力感に着目するという点、そして主観的体験を言葉化するやりとりとして、情動と体験に着目し自己存在の恢復をケアするという点について論じ、他者との関係性と当事者にとっての他者経験に着目することが成長促進的な環境の創出につながるということについて述べた。

さらに《人生に意味と秩序をもたらすケアリング過程の探求》については、ナレーション分析によって、時間的文脈の中で現在を中心に多層的に自己とのつながりをつけナレーションを綴り直していくということが自己存在の安定をもたらすケアリング過程として明らかになった。またその紡ぎ手としての当事者に添い聴き手として助力するという、ケア

の担い手の機能が明らかになった。以上が、自己存在を支え、人生とともに「幸せ」にそして「生き抜く」ことを支えるケアリングとして、導きだされた結論である。

# 学位論文審査の要旨

主 査 教 授 田 中 孝 彦

副 査 教 授 室 橋 春 充

副 査 助 教 授 間 宮 正 幸

副 査 教 授 上 野 武 治 (北海道大学医療技術短期大学部)

## 学 位 論 文 題 名

### 青年期精神障害者へのケアリング

#### 精神障害者の narration 分析をとおした自己の成長に関する研究

著者は、この十数年の間、精神科臨床、とくにリハビリテーションの領域に位置づく精神科デイケアを主な臨床実践のフィールドにしてきた。本論文は、そうした臨床実践の蓄積をもとに、青年期精神障害者に焦点を当て、そのケアの基本的なあり方について研究したものであり、「序論」「本論」「総合的考察」の三つの部分から構成されている。

「序論」では、主題に関わる先行的実践・研究として、ケアの思想・概念の系譜、精神障害者へのケアの歴史的展開の跡などがふりかえられ、検討されている。とくに力が注がれているのが、ケア論の古典とも言うべき M. Mayeroff の *On Caring* (1971) についての検討である。この作業を通じて、ケアという営みが、「相手が成長し潜在能力を発揮することを助けること」、「相手が他の誰かをケアできるように援助すること」、「相手が自分自身をケアすることが出来るように援助すること」であり、「他者へのケアを通してケアの担い手も成長する相互的な営み」とであると定義されている。そして、ケアの概念を重視し、ケアの思想を深めていくという課題の今日的な重要性が明確にされている。

「本論」は、二種類の研究から成っている。第一は、事例研究であり、著者が臨床的に関わった心理教育相談室の利用者（一名）と精神科デイケアの利用者（一名）、また著者がスタッフグループの一員として関わった精神科デイケアの利用者（一名）についての事例がまとめられ、その分析がなされている。第二は、調査研究であり、著者が参加する精神科デイケアの利用者（五名）についての、退所直前の時期とそれから数年後の二回に渡る面接調査の結果がまとめられ、その分析が行なわれている。分析の方法としては、精神障害を抱えて生きる当事者である青年の *narration* を構成し、それを資料として、各々の青年の障害の内面的・主観的な体験の過程を、質的データ分析の方法である *Grounded Theory* を参考にして、吟味するという手続きがとられている。その結果として、各々の青年が、「病い」を得たという事実は変わらないが、その事実に与える意味を絶えず変化させて生きているということが、浮き彫りにされている。その内面的過程においては、簡単には「おさ

まらない」事態を、たとえば、なかったことと考えて「帳消し」にしたり、自分の力ではどうにもならないことを医者に頼って「あずける」ことにしたり、悪いことばかりではないと「共存」しようとしてみたりといった独特の仕方の意味付与が行なわれている。もちろん、おさめきれずに、不安定の「悪循環」に陥ってしまうこともある。そして、その過程が、「否認」「混乱」「解決への努力」「受容」といった「受容段階論」では捉えきれない、複雑な様相を帯びていることが明らかにされている。

「総合的考察」では、青年期精神障害者へのケアのあり方が探求されている。まず、*narration* の分析を通して描き出された青年期精神障害者の内的・主観的体験を綴る過程が、彼らの自己感覚、「自己存在の確かさ感」(*self-awareness*) の形成の過程としてとらえ直されている。次に、人生を切り開く時期にある青年期精神障害者の、目に見えない精神障害を抱えて生き抜いていく過程へのケアの基本は、彼ら自身の *narration* にそうことであり、それが人との繋がりをつくり、生活上の問題への対処努力を導き、有力化 (*empowerment*) を支え、自己の成長を助けるケアリングとなるという結論が導かれている。最後に、この研究を通じて著者が到達した見地と、J. L. Herman が *Trauma and Recovery*(1992)で描いた心的外傷体験からの回復の過程とその援助についての理論や、「物語る」(*narration*) ことによる「現在化」(*presentification*)を人格的統一の契機として重視した P. Janet の人格発達論などとの理論的照合が行なわれ、ケアについての「時間論的アプローチ」を発展させることなど、今後の研究課題が整理されている。

今日、精神障害者のケアにおいては当事者の立場に立つということが語られ、当事者の内的体験の世界に接近しようとする研究も始まりつつある。しかし、それらには、問題の複雑さや困難さもあって、断片的な記述に終始したり、単純なモデル化に走ったりする傾向も見られる。そうした状況のなかで、青年期精神障害者の内的体験過程とそこにある論理をこれほどリアルに描き出し、それにそったケアのあり方をこれほど徹底して究明した研究は稀であると言える。本論文は、それを可能にした方法論的努力を含めて、青年期精神障害者への理解と彼らへのケアの質を深めるための貴重な学問的貢献になっている。

同時に、この研究を通じて、援助者がかつての利用者に面接するという調査方法に伴う問題、語られた言葉によって内的世界を理解しようとするに伴う問題、語ることを契機として人格の発達を支えようとする援助論に伴う問題、個々の障害の性質についての認識を深めることとケアの普遍的な思想を深めることとを結ぶことの難しさ、当事者が語る言葉と理論的研究の先端で使用されている概念との間に脈絡をつけることに伴う困難など、理論的自覚を深め、研究方法論としてさらに掘り下げて検討すべき問題も鮮明になっている。これらについては、研究の一層の深化を期待したい。

以上の評価に基づき、著者が北海道大学博士(教育学)の学位を授与される資格があるものと認める。